

藍  
の  
風  
紋

作  
高橋玄洋

藍の風紋

目次

旅立ち	4
鬼手形	41
ささくれ	76
冬映え	108
霜ばしら	132
雪おこし	170
擦れ枯らし	187
白い波濤	238
いのちの祭り	277

## 旅立ち

小千谷の秋は霧が走るように抜けて行く。街を二分する信濃川の水面に朝霧が走ると長い冬の始まりである。雪国では冬に入ると家を空けるわけにいかない。

「ようしッ！」

阿紀は男の子のように自分に気合いをかけて立ち上った。大した決意ではない。十日ほどの旅に出るだけだ。

阿紀は三十五才になる今日まで殆ど越後を出たことがなかった。高校の修学旅行は京都奈良だったし、今でも仕事の連絡や展覧会などで東京に出掛けることも多い。が、用を済ませると何時もとんぼ返りだった。生まれた時から馴染んできた越後の外に居るといふだけで落ち着けない。

そんな阿紀が突然ひとり旅に出ると言い出したのに、弟や弟嫁は目を丸くした。

「珍しいこと、お義姉さん、何処へ……？」

「徳島に藍を見に行きたいの。前から藍建を見たいとは思ってたんだけど、来年の展覧会のこともあるし、思い切って行ってこようと思うの」

「本腰なのね、今度の作品。そうよ、ゼツタイ外の空気も吸ってみるべきよ。ねえ」

妻に同意を求められた勝次も、

「四国まで行くんなら西の方一回りしてくるといい」

「出来たら藍玉のルートも付けてきたいと思ってるの」

藍建を見たいのは嘘ではない。前々から徳島の藍建の秘伝を聞き、より良い藍を手に入れたいと思ってきた。が、阿紀に今度の旅行を踏み切らせたのは明らかに耕之輔からの手紙だった。徳島行きは付け足しにすぎない。

坂戸耕之輔の手紙は圭子も知っていたから、耕之輔の居る山口へとは内心を見すかされそうで、言い出せなかった。そうでなくても男女のこととなると妙に過敏に反応する弟嫁である。

阿紀は弟一家と同じ敷地に小さな別棟を建てて貰って住んでいる。去年の夏までは母とふたりだったが、その母に逝かれてひとりになってしまった。弟の勝次は、せめて食事だけでも一緒にと言ってくれたが、いい時ばかりとは限らないと考え断った。幼い甥や姪が

可愛くないわけはなかったが、可愛いなりに面倒に思うこともないではない。農家の屋敷内に庭を隔てて別々に暮らしているくらいで丁度よかった。

「そうだ、お義姉さん、あの人に会ってきたら？ ほら、山口の例の手紙の人……何とか耕之輔さんに」

圭子が今思い付いたというふうには声を大きくした。

「そ、そうね。その手もあるわね」

その手紙が届いたのは母の一周忌を済ませた翌日で、阿紀は法事に使った膳を拭いていた時だった。

「仮名で藤波アキさま、となってるけどお義姉さんだよね」

圭子がそう言ったのは、祖母もアキだったからである。阿紀は祖母の名前を貰ったのだ。その祖母は八年前に亡くなっている。差出人は坂戸耕之輔とあったが、阿紀はその名に覚えがなかった。墨跡からもかなりの年配と思われる。

突然このような便り差し上げます失礼お許しください。私は山口で土などいじっておる者です。

実は私、貴女さまの織られた越後上布を持たせて頂いておる者です。この夏も涼しく愛用させて貰いました。亡き父から譲られた品です。色は黄錆で

無地、今は黄錆色も殆ど麻の生地になくなっております。

この便り差し上げますのも、先日、土蔵整理の折、計らずも父の書き残した若き日の帳付けを発見、その中にこの上布が貴女さまのお手になる物であること、貴女さまが類希れな織姫であられること、そして上布の手入れには産地に里帰りさせ雪晒しするのが一番であることを貴女さまから直々お教え頂いたことなどが記されておりました。

愛用の出所が判り、しかも由緒ある品と知って感激致しております。

つきましては甚だ勝手なお願ひではございますが、御地に里帰りさせ雪晒しをお願い出来ますものかどうか、その辺りの事情伺いたく、不しつけ願ひず筆をとりました次第です。

御面倒でも御返事給わらば望外の幸せに存じます。もし筋違いの願ひでしたらお捨て置き下さい。勝手ばかり申しました。涼しさ増します折から呉々御自愛下さいますようお願い上げます。

御家族さまによろしくお執り成し下さい。

九月吉日

坂戸耕之輔

藤波アキさま

手紙は明らかに祖母に宛てられたものである。

阿紀は、祖母の上布が今も生きていることに感動した。胸が熱くなり息苦しさに大きく息を吐いた。そして、祖母宛てなのに、いつか自分に宛てられた手紙のように錯覚し始めていた。

祖母の上布は阿紀の手元に一反も残っていない。祖母が上布の袖ぎ手として抜群の織手だったことは今も語り草になっている。阿紀も三度ほど、これがそうだと見せられたことがある。一つは織物資料館へ寄付された破裂<sup>はぎ</sup>れで、もう一つは個人所蔵の羽織だったが、保存が悪く畳み目が朽ち、もちろん使用に耐える物ではなかった。もう一つは噂を聞いて訪ねたのだが、かなり新しく祖母のものとは思えなかった。

祖母のアキが上布を織っているのを阿紀は見たことがない。

晩年の祖母は木綿の、それもかすりしか織らなかつた。眼を悪くした祖母は「もう上布は無理だ」と繰り返しこぼしていた。

「今どき、まだ雪晒しなんかやっていると思っているのかしら」

弟嫁の言葉に邪気はなかつたが、そうした言い方にさえ腹立たしさを覚えるほど、この手紙に阿紀はたかぶっていた。

圭子がいうように、雪晒しは今も行なわれていない。それどころか、上布にしる縮<sup>ちぢみ</sup>にし

ろ、手織りでは殆ど生産されていないのが現状だ。しかし、その一方で雪国の風物詩として雪晒しは観光ポスターやパンフレットに大きく扱われ、越後織物の看板になっている。

「婆ちゃんの上布が、まだ使われていたなんて考えてもみなかったわ」

阿紀は圭子の手から手紙を取り上げると、改めて読み返した。

「親子二代に着て貰えるなんて婆ちゃんも幸せよね」

阿紀は自分にもそんな作品が一つでもあるだろうか、と考える。たとえ展覧会で誉められたからと言って、それはそれだけのものだ。祖母の上布には、他に代え難い味があつて、それがこの愛着につながるのだろう。阿紀は祖母に羨望と嫉妬を覚えた。

それ以上に祖母の仕事を直に手に触れてみたかった。

圭子が手元の手紙を覗き込むように言った。

「この人、お祖母さんがまだ健在だとも思ってるのかしら。自分のお父さんが着てた、それを織った人物が今いくつ位か想像つきそうなものじゃない」

「婆ちゃん元気ならまだ八十二よ。それに婆ちゃんの名前しか先方には分からないだもの、貴女は亡くなっているだろうとも書けないでしょ」

阿紀は尖った言い方をした。圭子は祖母が亡くなってから来た嫁である。祖母への思い込みが違うのも当然だった。

阿紀は自分の離れに帰ると、突然舞い込んだ手紙を繰り返して読んだ。そして、この差出

人は、祖母の死を予感していると感じた。

そう思って読むと、末尾に太く書かれた「御家族さまによろしく……」が生きてくる。

「筋違いのお願いでしたら……」の一節にもその気配が察せられた。

「よしっ、雪晒しをやってみよう」

阿紀は早速返事の筆をとった。

手紙を頂いたお礼、祖母の上布を今も愛用して貰っているお礼、祖母の亡くなったことを書き、孫の自分も同じ道を志しているので未熟だが上布の里帰りは喜んでお引き受けしたい。それだけ書けばいいのに、それが思うように書けない。

何を気取っているのだ、と自分を笑ってみるのだが、やはり素直には書けなかった。阿紀はそれを坂戸耕之輔のせいにした。

どう書いても彼の手紙とは比べるべくもない。第一、祖母や祖母の上布への愛着がまるで出ていない。文章もそうだが字も見おとりして仕方ないのだ。これが私なのだから諦めるしかないと思いつながら、反古を重ねているうちに結局返事を出すチャンスが失ってしまった。

十月末になって、突然耕之輔を訪ねようと思いついたのは、雪が来て家を空けると雪下ろしなどで母屋の弟一家に迷惑を掛けることもあったが、それ以上に、後悔に捕われて長い一冬を過ごすのが煩わしかったからである。

阿紀は自分の中に勝手に広がっていく耕之輔を持って余っていた。

手元の地図では長門市としか出ていない。街の本屋に出掛けて中国地方の旅行案内を買い、ついでに旅行社を覗くと、以前から文化団体の会合などで顔見知りの支店長から、日程まで決められてしまっていた。

「長門市には確か青海島という名勝があったな」

大きなガイドブックを持ち出してきた支店長は、遊覧船が断崖の間を抜ける写真をしめした。

「私も行きたいなあ。旅は気分が変わるからいい句が出来るんだ」

俳句会を主催する支店長は阿紀の知らない句を口ずさんだ。

「去来ですよ」

阿紀はもう日本海の潮風を肌で吸っている自分を感じていた。

「いよいよだって？ 姉さんも時には気分を変えんとな。年ぢゅういざり機ばたに向かったんじゃないよ」

勝次が言うのに、傍らから圭子が冷やかした。

「お義姉さん、旅先でロマンスが待ってるかもよ」

「ロマンスとはまた古いわね」

冗談にまぎらわせながら、阿紀は顔を赤らめる。

その朝、圭子は赤飯を炊いて阿紀の旅立ちを祝った。

「大袈裟ね。すぐに帰ってくるのに」

阿紀は笑ったが、圭子の実家では一泊の旅行でも赤飯で送り出すのだという。小さな甥がその赤飯をポロポロこぼすのを、勝次は「駄目だなあ」と、指でつまんでは自分の口に運んでいる。阿紀は弟やその嫁に何時もと違う華やぎを見ていた。

駅へは弟自慢の赤い新車に甥や姪も乗り込んで一家総出の見送りとなった。

「これからアタシの洋服買いに行くの」

姪がうれしそうに言う。

「そう。いいわね」

ハンドルを握る勝次も、助手席の圭子も前方を見たままだった。

駅頭でその車に手を振りながら、阿紀はそこに過不足ない家族を見ていた。小さな車は余計者を降ろして如何にも軽そうだった。

「赤飯で送られちゃった」

ふと、はみ出し者のひがみがでる。

列車が長いトンネルを抜け、関東平野にかかる頃、阿紀はやっと旅を呼吸し始めていた。ガイドブックを出してみる。もう膝に置くだけで勝手に開いてくれるページだった。

耕之輔の住む長門市は漁業の町と書いてある。手紙には土などいじっている、とあったが、網元の隠居で趣味に作陶など楽しんでいるのだろうか。萩焼の窯元と考えるには萩の町と離れ過ぎていた。

彼の住む浅谷の近くに長門湯本という温泉があり、宿泊案内にも数軒のホテルや旅館が並んでいた。旅館の主人とも考えられたが、坂戸という名を連想させる旅館は見当らなかつた。

年は五十過ぎ、土蔵のある家で打ち水をした坪庭を前に、練れた黄錆の上布を軽く着て団扇を使う半白髪の紳士。それが旅の支度をしながら阿紀が勝手に作り上げた坂戸耕之輔像である。

車窓の田園風景に十五年前のあの日が突然よみがえって阿紀を慌てさせた。二十才の秋の恋の逃避行だった。

あんなこともあったと、今は旅にでも出なければ思い出すこともない昔の恋だった。しかし、阿紀は今、耕之輔を訪ねる旅が、あの駆け落ちと同じ根から出ていることに気付いていない。十五年前のあの時も、相手への勝手な思い込みから造り上げた幻影への憧れに過ぎなかった。だから十日で連れ戻されたのだ。

東京で一寸した用を済ませ、赤坂のホテルに一泊、翌朝十時過ぎの新幹線に乗って新下関に着いたのが十七時前、旅行社で書いて貰った通り、上りの普通で厚狭へ行き、長門行

きに乗り換えると、陽はもう沈みかけていた。二両連結のディーゼル車は山あいを摺り抜けるようにして走る。山頂にかすかに残っていた茜色も消えて麓の農家に灯がはいると、さすがの阿紀も心細くなった。

突然に行つて耕之輔が在宅している保証はない。それはそれでいい、来意を告げて、祖母の上布を預かつてくれればいい、そう言いきかせてやってきたものの、現実には余りに遠い旅であった。

長門湯本は、それでも灯りの目立つ街だった。狭い家並みを抜けた車は橋を渡つて田圃らしい闇を走つた。

ホテルは思ったより近代的な建物で、里山を背負っているらしかった。季節はずれのせいか広いロビーは閑散としている。

フロントにクーポン券を出して、ふと見ると横の陳列ケースに、萩焼の茶碗や花瓶、徳利などが並んでいる。小さな木札に坂倉新兵衛、坂田泥華などの字が見えた。阿紀も目にしたことのある名匠の名だ。

「お待ちせしました」

土地の人らしい中年の女性が案内に立った。

「この辺りには坂の字のつく家が多いんでしょうか」

「はあ……？」

阿紀の訊く意味をやっと呑み込んだらしく、

「萩焼の窯元に多いんです。古い昔、朝鮮半島から技術を持って来られて帰化なさった方々と聞いております」

部屋は三階の和室だった。

「坂戸さんというお宅ご存知ありませんか」

「さあ、この辺りでは坂戸先生のところしか知りませんが」

「坂戸先生？」

「浅谷窯の坂戸耕之輔先生です」

「そ、そう……」

「坂戸先生をお訪ねなんですか」

「いえ、そういうわけでは」

言葉が濁したが、心なしか仲居さんの阿紀を見る目が変わったようだった。

「新潟からでは大変でしたでしょう。ゆっくりお湯につかつて暖まって下さい。その間に夕食の支度をおきますから。お飲物は如何しましょう」

阿紀は地酒を一本だけ頼んだ。

仲居さんが去ると、阿紀はまず着物を出して衣桁に掛けた。旅立ちを思い立った時から、耕之輔を訪ねるのは和服に決めていた。迷つた末の自作の小千谷紬だ。



風呂上がりのロビーで、阿紀はもう一度陳列ケースを覗いた。中央のケースに耕之輔の茶碗が紫の小伏紗に座っていた。

如何にも萩焼らしい素朴な感じの井戸茶碗だ。阿紀は暫くは息を詰めて見、気がついて慌てて辺りを見回した。幸い誰も見ていない。改めて目を低くして眺め直した。

何の変哲もない形だがシンとした静寂があった。側に参考品の札があった。自分が知らないだけで、坂戸耕之輔は大変な人らしい。胸がドキドキした。

「お気に召しましたか」

直ぐ頭の上で男の声がして阿紀は目を上げた。

「坂戸耕之輔先生とおっしゃいますと……」

阿紀が訊くのに、この家の主人らしい男は、

「これは先代です。先代は素晴らしかった。特に井戸茶碗は……」

「……」

「いい物でしょ、坂戸先生の中でも傑作だと思っています」

言葉の響きに作者への尊敬がにじんでいる。

阿紀は、当代は？ と訊きたかったが、やっと呑み込んだ。

部屋に戻ると海の幸が派手に並んでいた。海老の髭がまだ動いている。小千谷でもひとりの食事だったが、旅先の独酌はわびしい。盃をひとり傾けながら宿の主人の口吻が気にかかった。

期待すまい、期待しては何時も失敗している私だ。

そう自分に言いかけながら、阿紀は十五年前の逃避行の夜を思い出していた。追ってくる筈の男をひとり待つ夜は心細く長かった。

絹糸を張ったような雨の晩、男はなかなか着かなかった。上野に近い旅館の和室で阿紀はまんじりともしなかった。男は夜行に乗り遅れ、朝一番でやってきたのだった。

男は高校の美術の教師で学生時代から憧れていた。卒業後、新潟の街で偶然出会ったのが切っ掛けでひそかに会う仲になり、阿紀の方でのめり込んでいった。

同年輩の若者たちが軽く見え、彼の目だけが確かなものに思われた。男には大柄な妻と二人の子供があったが、阿紀にはそんなことはどうでも良かった。

駆け落ちに踏み切ったのは阿紀が妊娠したからである。言い出したのは男の方だが、或いは阿紀がそこまで追い込んだのかも知れない、と今の阿紀は思う。男には生来の気弱さが目立った。

男はヒステリックに飛び出して来たものの何の用意もしていなかった。

手ぶらで旅館に現われた男に阿紀は最初の幻滅を味わった。

「何とかなるだろう。なんとかなるさ」

ぼう洋と男を大きく見せていたものが無計画、無責任から来ていることが見えた時、阿

紀は血が引いていくのが判った。

五日後、杉並にある男の叔母の嫁ぎ先に顔を出すと追手が先回りして待っていた。

この恋は当時の彼女には命懸けのものだったが、今思えば恋に憧れた恋であり、若さのなせる愚行だった。

二十才の娘は、上京してきた母に連れられ病院の門を潜り、十日目には傷心の身を越後に戻されていた。

しかし、この逃避行は彼女のその後を大きく変えた。

田舎のことである。駆け落ちという派手な道行きをやった娘に世間の目は厳しかった。

男に妻子があつたことから、阿紀は一方的に悪者とされた。平凡な高校教師の家庭を引き裂いた途方もない不良少女。それが彼女に押された烙印だった。

阿紀が祖母の後を継ぎ、自立の道を選んだのはこの恋の失敗からだから、結果から言えば自立のスプリングボードではあつた。

阿紀は今、小千谷伝統の織りと染めで知る人ぞ知る存在になっている。その意味ではあの無鉄砲な恋を悔やむ気持ちにはもうなかつた。

だが勝手に男の像を作り上げ、憧れの幻影を追っていることは、今もあの時も変わらな

い。

いた。

障子を開けると裏の丘は意外に殺風景で頂きに小さな墓地が見えた。近くの松葉に水滴が美しく並んでいるのを飽かず眺めては時計を見た。着替えるタイミングが掴めない不安定さである。

雨は止んだが厚い雲が走っていた。錆朱無地の染帯を締め、鏡の前でポンと叩いた時、電話が鳴って車が来たことを伝えた。約束の時間より十分も早かつた。

口紅が帯に負けている気がして一度拭き取ると逆に生き生きして、そのまま引き直すのを止め、スーツケースを持った。

荷物はフロントに預けていくつもりである。

「坂戸先生の所ですね」

運転手が念を押した。

「いえ、一度海岸の方に回って下さい。海岸を見てから坂戸先生の所まで……」

「逆方向だけどいいんですね」

「ええ」

初めて訪問するには時間が早過ぎたし、阿紀自身まだ心の準備が出来ていない。

海は荒れていた。白波が目立ち、漁港特有の生臭さが舞う中で遊覧船欠航の札が風にカタカタ鳴っていた。

遠く本州の西端近くに立っていることが不思議な気がする。中藍の紬に錆朱の帯で立つ三十五才の女が如何にもこの風に似合っている気がした。その風景は痩せた灰色の秋である。

阿紀は思い付いて花屋に寄って貰うことにした。

花束を積んだ車はホテルの前を逆行し、稲刈りを終えた田圃の中を山裾に向かって走る。「こっちの谷が深川窯で、浅谷窯はもう一つ向こうの浅い谷あいです」

無口な運転手が初めて自分から口をきいた。

車は小川に添った道へと曲がり、狭い谷あいを上って行った。

前方の樹々の間に赤煉瓦の煙突と大屋根が見えた。

「降ろして下さい」

「窯場の庭まで入れますよ」

「いいんです」

阿紀は強引に言って車を捨てた。

怪げんそうにドアを閉めた運転手はそのまま車を走らせ、小さな石橋を渡って窯場へと入って行った。そうしなければUターン出来ない道なのだ。

阿紀は思わず笑ってしまう。

車は戻ってくるよ、

「先生いるよ」

と声を掛けて去って行った。

窯場は橋を渡ると小さな広場になっていて、正面は倉庫らしかった。案に相違して無人の静けさだ。何処を訪ねればいいのか見当が付かないまま、広く扉の開いた倉庫を覗くと、扉の裏にむしろに座った男がいた。

「あのう、失礼ですが……坂戸耕之輔先生のお宅でしょうか」

「そうですね……」

目が慣れると男は梱包しているらしかった。

「私、新潟の小千谷から参りました……藤波と申します」  
名乗る前に耕之輔の方で振り返っていた。

「あッ……」

いかにも不意を衝かれた感じである。

「坂戸先生でいらっしやいませようか」

「ようやく阿紀が言うのに、」

「……おい、清水！ 清水はおらんか！」

蛮声を張り上げる耕之輔だった。

その時、阿紀は耕之輔の右頬に大きな火傷の跡を見た。

やってきた青年に阿紀は紅葉の美しい庭伝いに、座敷へと通された。

阿紀の鼓動はまだ収まっていなかった。それが耕之輔が思いのほか若かったことから来ているのか、その直後に見た頬の傷痕から来ているのか、よく分らなかった。

まるで予想と違いながら、阿紀のなかで「思った通り」の耕之輔だった。

若い長身の女がお茶を運んで来た。

「暫くお待ち頂きたいそうです」

「お忙しいんじゃないですか？ それでしたら、私また出直して参ります」

「いいえ、忙しくなんかありません」

娘の返事はハッキリしていた。いかにも良家の娘といった感じで物怖じしない大きい目だった。

「荷物を取りに来るように電話をしてみましたらしいの。直ぐに済みます」

娘は立ちかけて、

「新聞を見ていらつしやったんでしょうか」

「はあ……？」

「違うんじゃないんです。失礼しました」

自分の質問が可笑しかったのか娘は、くくつ、と口を押えて出て行った。

床の間に四角い陶板が立ててあり、葱が横に三本描いてあった。一筆書きながら葱の一

本一本が堂々と腰をすえている。染めの帯にすると如何にも映えそうだった。

娘が閉めて行った雪見障子に枠取りされて二本の赤松の幹が何の変哲もなく並び、またその間から遠い山肌が見えている。

阿紀には長い時間に思われたが、五、六分だったかも知れない。

「お待ちせしました」

太い声だった。襖が開くのと同時に耕之輔はもう座卓の向こうに座っていた。

「返事がないので諦めました」

「申しわけありません。筆不精なものですから」

阿紀は改めて自己紹介し、上布を織ったのは祖母であること、自分も祖母の後を継ぎたいと同じ道を志していることを告げた。

「わざわざ来て頂けるとは、とんだ迷惑を掛けてしまったものだ」

「いえ、徳島に藍を仕込みに行く用もあつたものですから、足を延ばしました」

気がつくくと耕之輔を見て話していた。

「上布をお預かりして帰りたいと存じます」

「雪晒しをして貰えるんですね」

「どれくらいの効果があるかは分りませんが、やってみたいと思います」

そして阿紀は祖母のこと、祖母の上布は今では見られなくなっていること、現在は殆ど

が機械織りで手織りの小千谷紬は皆無に等しいことなどを話した。

「雪晒しなどもポスターの上だけの話で全くやってはおりません。たまにあっても観光協会が写真愛好者を集めての撮影会です」

「どこの世界も一緒だな」

「陶器の世界でもそうですか」

「窯に火を入れるとカメラをぶら下げた連中が大勢やってきます。道で訊かれるのも、火入れは何時か窯出しは何時かばかり……。汗かいてる傍でパチパチ、パチパチ、苦々しい限りです」

それは阿紀とて同じ想いである。写真のために何度いざり機に座らされたことだろう。織ってもいないのに織っているような仕種や顔をするのは何ともやり切れないものだ。役所などから頼まれて、浮世の義理と割り切っても後々に嫌なものが残った。

阿紀はそれを言いかけて止めた。そんなことをしている自分を耕之輔に曝したくなかった。

「僕は、そういうのを、見せかけ文化と呼んでいます。文化も十年前までは西瓜の切り売りをしていたが、今じゃ西瓜の影絵を見せるだけで金を取ってる」

阿紀もその通りだと思う。

しかし、耕之輔の口からその言葉が出る時、執念のような暗い塊を感じるのは何故だろう。

阿紀は話題を変えようとして床の間を振り返った。

「この陶板の葱はどなたがお描きになったのでしょうか」

「香月先生です。香月泰男先生を知りませんか」

「あの、シベリヤシリーズで有名な……」

「そうです。この町のはずれにお住まいで、家にも時々遊びにみえてました」

「そうですか」

阿紀は、香月泰男という画家には強烈な印象があった。新潟に回って来た展覧会で観た「雪の海」という題の、夜の海に降る雪を描いた殆ど無彩色の暗い絵だった。

あの暗さだ。

耕之輔が急に見えてくる思いだった。

しかし、目の前の陶板の葱は伸びやかで何の屈託もない。

「こんな明るい絵も描かれたんですね」

「シベリヤシリーズばかり描いていたわけじゃありませんよ」

「私が見たのは夜の海に降る雪の絵です」

「ああ、あれは暗い」

耕之輔の言葉にも屈託はなかった。

「先刻から、麻の帯にこんな絵を載せたらどんなにいいだろう、と見とれていました」

「いいでしょうね。貴女自身はどうなんですか？ 上布はなさらないんですか」

「しなければとは思いますが、なかなか出来ません。世の中が変わって冷房が普及してから、上布を着る人はいなくなりました。手入れも大変ですし、むしろ暑苦しく思う人も多いのです」

「注文があればやりますか」

「さあ、注文主にもよりますわ」

笑い合って急に気分がほぐれた。

「話によると糸に紡ぐのも大変なんだそうですね」

「今は麻自身にいいものが少ないのです。それに糸を紡ぐだけでもかなりの年季が要ります」

「お祖母さんのようにはいきませんか」

「なにより出来が問題です。とても祖母のようには参りません」

「貴女も先代の亡霊に苦しめられている口だな。先代がいい仕事を残してくれるのも罪なものです」

阿紀はホテルの主人の話を思い出していた。

「全くですわ。私など何時も祖母と比較されて損ばかりしています」

言いながら阿紀は耕之輔のために上布を織る自分の姿を想像していた。

「ところで、お父さまは何時ごろ祖母の上布をお求めになったのでしょうか」

「昭和二年です。日記によると昭和二年六月十日……お宅へ伺って求めています」

「昭和二年といえは大雪害の年ですわ」

「そうです。父はこの辺りの青年団の若者と雪の被害地を見舞いに出掛けたいのです」

「じゃ、小千谷の家に……」

「泊めて頂いたようですよ」

「まあ……」

阿紀には意外な展開だった。

「親父たちは慰問の品を担いで行ったらしいのですが、逆にお世話になったようですよ」

「昭和二年と言えば、祖母はまだ……」

阿紀は指折り数えてみる。

「十八才のようですよ」

先に答えたのは耕之輔だった。

「お父さまの日記にはそんなことまで……？」

「それだけではありません。綿々と恋情のほどがしたためられているんです。だから住所も分かったし、里帰りもお願いする気になったのです」

「祖母はまだ結婚前ですわね」

「親父も独身です。お宅に蔵はありませんか」

「ええ、でも戦後建て直しました」

「それは残念。しかし捜すと親父のラブレターか何か出てくるかも知れませんよ」

「ほんとに……」

「親父は確か二十六才の筈です」

阿紀には若い祖母の顔は想像出来ないが、祖母にだって若い頃はあった筈だ。小千谷の家裏に十八才の娘と二十六才の青年を置いてみたが、やはり実感はなかった。

「ところで……」

耕之輔は言いかけて口をつぐんだ。襖が開き、先刻の娘が抹茶と乾菓子を盆に載せて運んできた。

「久美ちゃん、悪いね」

耕之輔は娘に対し遠慮がちだった。

立ち上る時、娘は長身の赤いワンピースの裾を大きくひらめかせて辺りに若さをふり撒いた。

耕之輔は娘が出ていくまで口をきかなかった。

どういう関係なのだろう、使用人でもなく弟子でもなさそうだ。かと言って男と女の匂

いもしない。それでいて阿紀は微かな嫉妬を覚えた。

「頂戴いたします」

茶碗は思ったより軽かった。萩特有の貫乳が見事に出た筒茶碗で、田舎の土塀を思い起こさせる。

「先生のお作でしょうか」

「先代、つまりお宅のお祖母さんに恋々とした男の作です」

阿紀はぼんやりと耕之輔を眺めていた。茶碗で顔を隠した耕之輔はまさに野武士の偉丈夫だ。年の頃は四十七、八だろうか。茶碗が消えると右頬に大きなケロイドが残った。

「それじゃ見て頂きましょうか」

耕之輔は上布を取りに立った。偉丈夫は立つと益々大きく見えた。

ひとりになると無人の家に思えるほど静かだった。阿紀は祖母のロマンスらしき話を聞かされ、風に揺れる花びらのように酔っていた。これは因縁なのだ。そうとしか考えられない。因縁によって私は今ここに座っている。そう思うと雪見障子越しに見える枯れ葉さえ貴重なものに思えてくる。

足音がして耕之輔が戻ってきた。二つ折りにした畳紙たとうが如何にも小さく見えた。

「ところで今日の予定ですが……？」

「お預かりしたら萩へ回ろうと思っております」

「じゃ決まった約束はないんですね」

「夜までに萩のホテルに入ればいいのです」

「せっかくいらしたんだ。もう一日何とかありませんか」

答える前に畳紙の紐が解かれ上布が現われた。

「これです」

阿紀は吸い寄せられるように上布を手にした。何という練れだろう。麻の硬さはどこにもなく絹の滑らかさと木綿の軽さで織り込まれた紗の感じだった。

「随分着こまれたんですね」

「何しろ六十年以上ですから。親父は夏の夜は何時もこれでした」

麻特有の黄錆色もほとんど消え、無色と言った方が当たっていきそうである。阿紀は溜め息をついた。

「ここまで着て頂けるなんて……お祖母ちゃんも冥利に尽きます。長い間、ありがとうございます  
ございました」

「それだけ着てまだこの通りですから素晴らしい物です」

「布は着手で決まります。祖母の物でなくても、こんなに練れた上布を見たのは初めてです。よほど手入れが行き届かないところは参りません」

阿紀は思わずハンドバッグから眼鏡を出して繊維を調べ始めていた。麻自体はかなり太

目の紡ぎである。その一本一本が二つにも三つにも裂けて練りをなしているらしい。

「さすがに本職だなあ」

耕之輔がしびれをきらして口を挟んだ。阿紀は眼鏡をはずして初めて気づき、

「あっ、失敗。近頃これが要りますの  
と顔を赤らめた。

阿紀が見ていたのは麻の撚りである。繊維と繊維をどう継いであるのか知りたかった。六十年も前に撚られた継ぎ目は専門家の阿紀でさえ殆ど分からないほど一本化している。固く癖の強い青年期の麻をどう撚ればこんな糸になるのか。

「麻の本当の良さはここまで使って頂いて出てくるものですね。驚きました」

「肌触りが何とも言えないのです。この肌触りを覚えたら他の物は着られない。馴染むというのはこういうのを言うのでしょうか」

阿紀は肌触りとか馴染むとかいう言葉が繰り返されるたびに目の前の耕之輔がまぶしくなり上布に目を落とした。

「父もこの肌触りを楽しんでいたのでしよう。或いはお宅のお祖母さまを思い出していたのかも知れない」

先代耕之輔が小千谷に泊った数日の間に祖母アキとの間に何かあったのか、その事が日記に書いてあるのかと、それが聞きたかったが、女の口から訊けそうな言葉は見付からな



かった。

「お手入れが大変でしたでしょう」

「秋になると水を通してよく陰干していました。陶器も乾かすのは陰干ですから干場には不自由しないのです。父の元気な頃は、これが干してあると、秋だなあ、と思ったものです」

「昔から、麻は刈られてからも生きていと言いますが、その証しを見るようです」

「陰干のあとはよく座蒲団の下に敷いてありました」

「お母さまがずっと……」

「まあそうですね。母がお尻の下に敷いていました。先代も若い頃は女出入りもあつたようですから、怨念が籠っているかも知れませんよ」

「まあ……」

畳紙に戻してから、阿紀は捧げるようにして言った。

「預からせて頂きます」

「お願いします」

「実は、雪晒ししてどの程度の効果があるものか自信はありません。或いは目に見える程の効果はないかも知れませんが……」

「いいのです。この上布に里帰りさせてやりたい、それが今回の目的です」

「ありがとうございます。研究して出来るだけのことをやってみます」

遠くで正午をつげるサイレンが鳴っていた。

「田舎ですから何もありませんが、お昼は付き合って頂きます」

強引に聞こえる言い方だった。

「でも、お仕事の邪魔をした上に……」

「いいえ、忙しくなんかありません。僕は親父とは違います」

上布の話で忘れかけていた暗い翳りが走った。

「先刻も言いましたが、もう一日何とかありませんか。ね、いいでしょう」

耕之輔の人懐っこさに阿紀は危うくうなずきそうになる。耕之輔をよぎる明暗は、山肌全体が突然晴れたり曇ったりする風の目を思わせた。巨体だけに目元に浮かぶ子供のような人懐っこさと、その目の奥をよぎる深い翳りとは別人の感さえある。

「越後からわざわざいらしたんだ。このままお帰り頂くわけにはいかない。そうだ。食事を済ませたら、清水に萩を案内させましょう。狭い街だから普通の観光なら半日あれば充分です。今夜はもう一度このホテルに泊って下さい。ね、そうしましょう。魚の旨い店を予約しておきます。今夜はゆっくり上布の話など聞かせて下さい。迷惑ですか」

「迷惑だなんて」

「じゃ、そうして下さい。これで決まりですよ」

耕之輔の畳み掛ける言い方に戸惑いながら、阿紀は嬉しかった。夢想癖の阿紀の予想を遙かに越える展開だったが、何か怖い気もしている。運とはそういうものだ。突然つむじを曲げることがある。

先刻の娘が蜜柑を運んで来た。

「もう届かなきゃいけないんですけど」

「混んでいるんだろう。もう来るよ」

仕出し屋のことらしかった。

「久美ちゃん、清水に来るように言って下さい」

「はい」

娘の声は如何にも明るく屈託がない。阿紀には二十六、七才に見えた。都会育ちにはない平らな伸びやかさであった。娘は阿紀に向かって言った。

「さつきは御免なさい」

「何のことでしょう」

「お忘れになったのならいいんです」

「何があつたの？」

耕之輔が、二人を見比べてどちらにともなく訊いた。

「いいの、いいの、おっしゃらないでね」

念を押す目を阿紀は可愛いと思った。悪戯っぽく耕之輔を見て立ち上がると、娘は小走りに行った。

「可愛い方。どなたですの」

「家内の妹です」

それは当然考えられることであった。阿紀も耕之輔が独身であることなど期待していたわけではない。

「今日は奥様は……？」

訊こうとして、阿紀はタイミングを失っていた。

清水という青年がやって来ると、耕之輔は阿紀を車で萩に案内するように言い、細々と指示を与えた。

「私が御案内すればいいのですが、ちょっと済ませたい用があるもので」

阿紀は恐縮するしかなかった。

車は一度長門市に出てから、海岸を走るのかと思ったら殆どが山と畑の道だった。

運転する清水は無口だった。こちらが訊かない限り口を開かない。訊いても答えは極端に短かかった。

今朝からの出来ごとがもう遠い昔のここのように思われる。耕之輔には野武士の風格がある。上布の畳紙を持つ手にも偉丈夫の大きさが感じられた。その大きさの中に子供のよ

うな人懐っこさと墨汁を流したような暗さが同居していた。

あの暗さは何だろう。香月泰男の絵に見る山陰の重さもあるだろう。名匠だった先代の重庄もあろう。顔のケロイドも一因かも知れない。だがそのすべてを重ね合わせても出てこない色合いがあつた暗さにはあると阿紀は思う。

しかし、阿紀自身がどんなに否定しようとも、今彼女の奥で一番気に掛かっているのは夫人と、久美ちゃんと呼ばれていた夫人の妹のことだった。

或いは夫人は病気なのかも知れない。入院して午後用の用というのはその見舞いなのではなからうか。

また私の悪い病気が始まっている。

阿紀は思い切つて訊いてみた。

「先生の奥様は今日はお出掛けでしたの？」

「ええ」

清水の答えは相変わらず素っ気なかった。

車は突然川にぶつかり、橋の向こうに萩の町が視野いっぱいに現われた。左手に写真で知っている指月山が望める。

「先生の言つた通りでいいですか」

「お願いします」

車は狭く古い道を選ぶように走つて海岸に出た。

「菊ガ浜の女台場です。降りて下さい」

清水も降りて阿紀を砂浜に誘うと女台場について簡単な説明をしてから、用を足して来るからしばらく待つように言い置いて車で去つて行った。

阿紀はひとり海辺に取り残されて潮風と対した。海からの風は着物の八つ口から胸元に冷気を吹き込む。清水の説明では、明治維新の折、下関に出兵した長州兵の妻たちが外国艦隊の攻撃に備えて築いた砲台跡だという。

阿紀は人気のない砂浜をひとり波打ち際へ歩いて行った。日本海に突き出した指月山の空にかき餅を並べたような秋の雲が縦に昇り頭上辺りで消えていた。

この雲は忘れられないものになりそうだ。

阿紀は寄せては返す細波さざなみに大きく胸を張つてみる。

渴いた砂を手を掬いながらつくづく着物で来て良かったと思う。女の旅立ちには着物は欠かせない儀式なのだ。

しばらくして戻つて来た清水は、萩のホテルをキャンセルして来たのだと言つた。

「これから何処に行きますの？」

「松下村塾跡と東光寺を回つてから、藍場川という掘割沿いを歩いて頂こうと思います。そこは是非観て頂くようにと先生からの言い付けです」

「藍場川って染めの藍場ですの……？」  
「……だと思えます。古い家が沢山残っている地区です」  
帰りは夕陽に向かつて走るドライブだった。

「先生ってやさしいでしょ？」  
「どうでしょうか」

「あら、違いますの」  
「僕には恐い先生です」

「お仕事には厳しいということかしら」  
「それもあります」

「他にも恐いってこと？」  
「先生って複雑な方なんです」

清水青年が初めて人間臭い言葉を口にした。

「芸術の仕事をなさる方ってみんな、複雑で難しいんじゃないかしら。まして清水さんは  
修業中の身ですもの」

適当に答えながら、阿紀は耕之輔のことをさりげなく訊き出そうとしている自分をずる  
いと思う。そう思いながら知りたいことは山ほどあった。

「お顔の傷は窯の火かなにかですの？」

「知りません」

清水の返事には何もなかった。バックミラーを見ると清水の目が夕陽に赤く光っていた。  
「でも僕は先生について行きます」

しばらくしてぼつりと清水が言った。

「でもってどういう意味ですの」

「どんなことがあったとしてもです」

「おっしゃってる意味がわかりませんわ」

「あなたも先生の虜とりこになりましたね」

「虜？」

「僕も先生の虜になりました。だからついて行くだけです」

「虜ってどういうことかしら」

「すべての面です」

清水はそのまま黙ってしまった。言われる通り今朝からずっと耕之輔の虜だった。これ  
を一目惚れというならまさに一目惚れだった。

「そうかも知れませんか。先生は魅力のある方ですもの。誰でも虜になるんじゃないか  
しら」

阿紀は素直な気持ちで言えた。言いながらもつと虜になりたいと思う。清水は黙ってハ

ンドルを握ったままだった。

「顔の火傷は、子供の頃だそうですね。お母さんのせつかんからだと聞きました」  
「まあ！」

耕之輔が上布の敷きのしの話をしてるのが思い出された。